

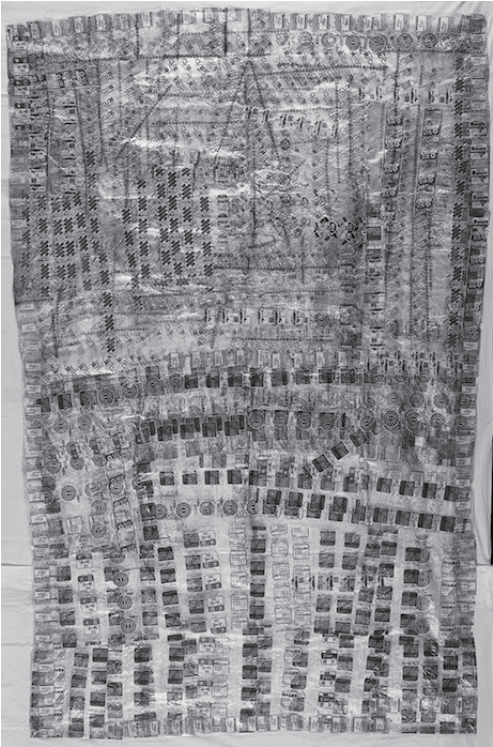
松谷武判「軌道-1-B」(1990)



イマンツ・ティラース「肖像と夢」(1991)



上前智祐「作品(食パン包装袋)」(1976頃)



眼と心とかたち

美術作品という<もの>との出会いは、ある意味で、人と人との出会いと同じであり、いわば縁(えにし)でもある。とはいえ、それを見る側が、何らかの美術作品との出会いを求める「心」がなければ、<もの>は眼の前を素通りしてしまっ、そうした出会いもやってこない。見る側がそれを精神的に求めているから、作品もやってくる。そのとき、ひと目でその作品に惹かれる場合もあれば、何度見てもなんら感興を起こさない作品もある。直感的に感じる場合もあれば、よくよく考えて頭の中でいろいろと理屈をめぐらせて考えなければ理解できない作品もあるだろう。現代の作品は特に理論(コンセプト)や文脈(コンテクスト)が先行する作品が多いので、門外漢にはチンプンカンプンだという場合も多い。そんな時、作品を鑑賞する手がかりとなる<ことば>を求めて右往左往するのは、学芸員も同じである。作品にまつわる様々な物語り(ストーリー)と解説(テキスト)、論述(ディスコース)、それらは作家の言葉の場合もあるし、美術史家や評論家、美術記者、ライター、ギャラリスト、コレクター、そして一般の鑑賞者の言葉の場合もあるだろう。そうした様々な人々の言葉による手がかりを探し出して、解き明かして、なんとか理解しようと努めることも多いのである。それは、作品というものが、やはり単なる物体ではなく、見つめる側、作り出す側、のそれぞれの精神的な思い、すなわち「心」が<もの>の「かたち」に託されているからであろう。

一方で、現代美術のある傾向は、そのように作品の背後に広がっていると考えられてきた、さまざまな物語や説明を不純物として、できる限りそぎ落とそうとしてきた。そうした事情を知らない人たちにとっては、言葉による解釈を拒絶することで、作品は単なる形式的な色と形だけの表面となって、ますます美術はわけのわからないものになってきた。しかしながらそうした作品を援護するための理論武装が、これまた、さまざまな言葉でなされてきたのである。いや、そのような作品の場合は、本当は理屈をつけずに、ものそのものの色、形、質感などを、音楽のように、純粹にいとおしめばよかったのであるが、なかなかそうにはいかなかったところが、美術という<もの>の本質であり属性だといえるだろう。

現代はグローバリゼーションの時代であり、デジタル、電子、情報化の時代である。その気になれば、誰もが、自ら情報発信でき、いくらでも社会に表現できるメディアを、世界中の人々が持っている。画像や動画は、高速度で電子空間を飛び交い、情報のみならず、人や物でさえも、地球上を自由に行き交うことが可能になってきた。表現を司るメディアの自由度は、近年格段に進歩し、その意味では、世界中のすべての人々が表現者でもある。人々の「眼」にふれる美術や画像は世界にあふれかえっている。しかしながら、真に問われているのは、その表現される作品の「かたち」の品質であり、内容(コンセプト)であり、「心」であり、それを見る人々の「眼」であり、「心」である。私たちの「眼」が求めているのは、美しい「かたち」であると同時に人間の「心」である。

展示構成について

展示室1は、50～70年代を中心とした関西の戦後現代作家と大阪トリエンナーレコレクションからなる。グランプリなどの受賞作、私の

思い入れの深い作品、これまで紹介する機会が少なかった作品、表現としてきわめて優れていると思われる名品、という基準で選定した。国内外の審査員をはじめ多くの美術関係者の「眼」によって選ばれた作品である。様々なアーティストたちの「心とかたち」が、その「眼」によってコレクションとなった。その「眼と心とかたち」をご覧いただきたい。展示室2では森口宏一の特集展示を設けた。その理由は大阪にゆかりの深い作家であり、個人作家のコレクションとしては、その質量ともに充実しているからである。初期の抽象絵画にはじまり、若い頃、「テムポ」という抽象作家集団を井原康雄らと立ち上げ、家業である大阪の洋品店の経営者として実業の世界に身をおきながらも、アルミ板を並べたレリーフやオブジェを制作し、鋼材やステンレスなどの工業材を用いたインスタレーションへと歩んだ現代作家である。終生、大阪の地で、モダニストとして現代美術の道を歩んだ森口の「心」の軌跡がわかるように、コンパクトにまとめた展示である。

展示室3では岩宮武二の佐渡シリーズ5点を、アメリカの80年代以降に活躍した現代写真家、リチャード・ミズラックの写真と対比させる展示構成にした。

はるかに浮かぶ隠岐島を望む町、鳥取県米子に生まれた岩宮の「心」には、常に日本海に浮かぶ離島の文化、風土への熱い思いが感じられる。「佐渡」は、そうした隠岐の島と日本海への思いの延長線上にある写真といえよう。岩宮のエッセイ集には「目前心後」という書名がつけられている。リチャード・ミズラックは40年以上にわたって砂漠の環境の変化を記録するなどアメリカの社会や文化の問題を、社会派の眼とフォーマリストの手法を合体させて表現し、ニューカラー、ニュートポグラフィックスと呼ばれる写真家でもある。時代も、国も、背景も異なるが、日本とアメリカの、それぞれの風景をみつめる二人の写真家の「眼と心とかたち」を比較していただきたい。

心の眼とかたち

大阪府と大阪市で新しい美術館計画が浮上したのを契機に、私は北海道の美術館での15年間に区切りをつけて大阪に戻り、府の学芸員となった。1992年5月である。80年代「関西ニューウェーブ」の活気は、90年代初頭、終息期を迎えていたが、その余韻はまだ残っていた。それから23年、国、府、市の美術政策の展開と紆余曲折はもとより、関西のアートシーンをみつめ続けてきた。そこには、美術に関心を持つ多くの人々がいて、表現する人がいて、それを見守る人がいて、それらの出会いを演出する人々がいて、出会いをもたらず場所がある。美術の世界で長らく活躍しても名を残すことができる人は、ほんの一握りに過ぎない。美術館に収蔵される作品は、さらに限定されており、関西で、日本で、世界で、美術の歴史に名を連ねることができるのは本当にわずかである。それでも多くの人々が、この「美」ということばに引き寄せられて、この世界にやってくる。「眼と心とかたち」は、美術に魅せられているすべての人々が共有するフレーズである。ここに展示された作品も、あまたある美術作品の中で、たまたま学芸員Nが、その立場で出会うことのできたほんのひとにぎりの作品に過ぎない。そうした作品の「かたち」を前に、「眼」にどのように感じ、頭で、どのように考え、「心」でどのように思うかは、すべてあなたしだいである。



森口宏一「間隙・股間」(1976)

バジル・コリン・フランク「顎と白い犬」(1996)



中塚宏行 なつかひろゆき

1954年大阪府生まれ。大阪大学文学部

美学科(美術史専攻)卒業。1977年～

92年北海道立美術館(札幌、旭川、函館)

の学芸員、学芸課長を経て、1992年～

2015年大阪府文化課、現代美術セン

ターを経て、現在、大阪府都市魅力創造

局文化課主任研究員(美術総括)、美術評

論家連盟、民族藝術学会会員。論文「オブ

ジェと記号」(1977)、著作集 「美術／

漂流」学芸員Nの30年(2007)、展覧会

「描かれた文字／書かれた絵」(1989)、

「森口宏一展」(1995)、「金光松美展」

(1998)、「上前智祐展」(1999)ほか